

審査結果の要旨

氏名 奥富 利幸

本研究は、明治期から昭和初期までを対象にして、近代能楽堂の形成過程を系譜的に研究したものである。

第1章では、研究の分析方法として、近代能楽堂を三つの系譜に分けて検証することを述べている。そして、三つの系譜である、対置式能楽場、圍繞式能楽堂、入れ子式能楽堂の定義を示している。また、本論文の目的として、各系譜の歴史的検証と近代能楽堂形成理念の検証を挙げ、具体的には、復元思想と欧化を掲げて各系譜に通底する理念を説明することを述べている。

第2章では、対置式能楽場の歴史的検証をしている。対置式能楽場は、江戸時代における御所や武家屋敷の能楽場に用いられた伝統的形式であり、明治前半期に頻繁に行われた明治天皇の行幸に際し、能楽御覧所の形式として継承されたことを述べている。そして、青山御所能舞台を事例に挙げ、見所となる表座敷は、部屋の造作は和室でありながら、床には絨毯が敷き詰められたこと。また、玉座の置かれた部屋には、床の間の代わりに暖炉が設けられ、欧化の影響を受けていた点を指摘している。

また、明治期に盛んに行われた博覧会において、能楽は余興芸能として採用され、天皇や皇族の能楽御覧に際して、常設の対置式能楽場が設けられたこと。さらに、一部の実業家が、この対置式能楽場を邸宅や別荘に建て、皇族などの饗応能に使ったことを述べ、対置式能楽場が、施主の個性により、従来の規範を大きく変化させたものであったことを指摘している。

第3章では、圍繞式能楽堂の歴史的検証をしている。まず、初めての圍繞式能楽堂として、能楽社を取り上げ、岩倉具視を筆頭として華族らが能楽社を設立し、芝公園内に能楽社が建設されたことを挙げ、能楽社の設立動機として、能楽が外国饗応芸能として位置付けられて、劇場としての能楽堂が必要とされたこと、及び、英照皇太后の催能の負担を軽減する目的があったことを述べている。また、圍繞式能楽堂は、当初、対置式能楽堂を基本とした構成から徐々に改造がなされて完成した。そして、一番大きな変容は、白州部分で、当初、対置式のごとく広く白州をとっていたが、脇正面に大きく見所を張り出したことで、徐々に白州が狭められ、遂には、白州の上に天窓の付いた屋根が掛けられて、完全に室内化した経過を明らかにした。また、この背景として、能楽が興行として催されるにつれ、大勢の観客が快適に観覧できる見所が求められたことを挙げている。

第4章では、入れ子式能楽堂の歴史的検証をしている。まず、入れ子式能楽堂誕生の背景には、演劇改良に影響を受けた能楽改良論があり、このうち、最もその論争が盛り上がりを見せたのは、劇場論であったと述べている。そして、その劇場論の発端となった「能楽堂改良会」での議論を取り上げ、議論の主旨が能楽堂を劇場として発展させようとする意図であった。また、明治末期の圍繞式能楽堂の見所改良議論として、帝劇参勤問題を取り上げ、当時の能楽関係者が能楽堂の見所の環境に不満を持ち、改良を望んでいたことを示した。後藤慶二の「観覧席改良論」を取り上げ、入れ子形式を意識した上で、観覧席においては、西洋の模倣はいけませんが、参考にしなければならないと結論づけていることを

指摘し、当時の関係者が、演劇改良の影響で欧化した演劇劇場の観覧席を強烈に意識していたことを明らかにした。

第5章では、まず、復元思想による能舞台保持と見所空間の乖離について検証している。江戸時代から明治、大正、昭和の各時代で、数多くの復元が行われていることを指摘し、その理由として、能舞台が元々、演能のたびに組んでは解かれる仮設の建造物であったこと。また、各能舞台の持つ由緒が重んじられ、敬われる思想があったことを挙げている。そして、復元思想と能楽改良による理念の通底を示す論文として、後藤慶二の「能舞台を作り物として見よ」を取り上げ、復元思想が、能舞台と周辺の観覧席である見所を区分させたのではないかと指摘している。

次に、改良手段としての欧化と能楽空間の室内化について検証している。まず、近代能楽堂の形成過程で、最初に欧化による影響が認められる事例として、天皇の椅子により観能を取り上げている。一方、囲繞式能楽堂で、脇正面側に観客席を設け、主たる賓客である天皇以外の陪覧者も屋根の下で観能ができるようになったことを示した。その結果、白州は屋根で覆われ、見所は完全に室内化された。さらに、能楽改良論で、見所の改良が論じられる中、大空間志向が芽生え、遂には、入れ子式で椅子式の能楽堂が最終的に近代能楽堂の定型として出来上がることを述べている。そして、近代能楽堂についての評価として、ブルーノ・タウトによる評価を取り上げ、タウトは、オペラ劇場への羨望から始まった能楽堂の欧化を完全に否定し、入れ子式能楽堂をオペラ様式と称して、その発生過程が、能楽の芸術から生じたとは考えられないという懐疑的な立場を表明したことを述べている。そして、この批評が、入れ子式能楽堂の発生要因となった能舞台と見所空間の乖離現象を見事に見抜いていて、近代能楽堂の形成過程において、見所の室内化が、元々屋外で演じられていた能楽場の多様性を失う結果となったことに警鐘を鳴らした点を述べている。

以上の通り、本論文は、近代能楽堂を初めて通史的に検証して、最終的に定型として成立した入れ子式能楽堂の形成経過を明らかにした。また、系譜として捉える分析手法を用いた結果、各系譜が変容し、大きく変化する際に、復元思想と欧化が大きく影響を及ぼしたことを明らかにした。したがって、この論文は、能楽堂が伝統的な能楽空間をどのように変容させて成立したのかを解明し、近代建築形成過程における欧化と伝統性の介在に関して新たな示唆を与えるものであるといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。